

季節巡る想い

太田 愛

長崎県・一六・高校生

初めてあなたに会った日から、私の瞳はいつもあなたを追っています。あなたの笑顔。あなたの髪。あなたの唇。すべてを――。

見た目は大人っぽくて近寄り難いのに中身はやっぱり子供ね。私の方が年上なのをいやでも思い知らされるのは少しつらいけど、あなたは私に言葉使いも態度も同い年の友達と一緒にだから落ちつくわ。

だけどそれが少しつらい。私にとってあなたはほかの人と一緒にじゃないのに、あなたにとって私は……。

約束もしてないのに二人会えたあの場所。「本当はあなたを待っていたのよ」と口に出せないこの想い。どうしたらいいのこの気持ち。

そうあれは五月の初め、あなたの誕生日プレゼントを何にしようかと考えてる時、あなたがバス停で女の子と二人きりているのを私は遠くで見っていたの。後で聞くとそ

れは私の友達で、あなたの彼女になってしまっていた。その時は笑顔であなたを応援したけど、今はもう。

彼女のことをうれしそうに話すあなたを見ていた私の気持ちが変わるでしょうか。彼女からあなたのことを相談された私の気持ちがわかるでしょうか。きっとわからないうでしようね。

時が経つのは早いもの。あなたと出会ったのを祝福するかのように咲いた桜の花は今ももう枯れ葉に変わり、風に舞っています。この長い月日で、あなたを忘れられると思っていたのに、その前に二人は別れてしまい、あなたの目には涙が浮かんでいました。それを聞いて心の中で喜んだ私をあなたは憎んでいますか。その後あなたの後ろ姿を見て、あなたが誰を想っているかと考えながら、寝静まった夜、一人枕を濡らす私。あなたの傷は、もう癒えていますか。彼女とは別れたのに、「好き」の一言が言い出せないの。

だから今日、私は一枚の紙に心を託してこの想いを伝えます。